野良猫対策の現状と今後の展望－人と猫の共生を考える－

齋藤　紗彩

野良猫対策については、近年、テレビなどのメディアで大きく取り上げられ、それらの活動を好意的に捉える人々も増えており、平成27年度からは返還・譲渡数は2万頭、返還・譲渡率では20％を超えるようになった。しかし、その一方で飼い主がいない野良猫に関するトラブルも多く、全国で年間約6万件前後の相談が寄せられている。

本論文では、野良猫を取り巻く環境に焦点を当て、その現状と課題、対策事例を調査し、人間と猫が共生できる環境づくりについて考察した。研究方法としては、文献、資料、インターネットを用いた調査、および2019年の開設以来、殺処分を一度も実施していない山形市動物愛護センター「わんにゃんポート」など、山形県内の行政や民間団体関係者へのインタビュー調査を実施した。

その結果、野良猫対策は本来、行政、民間団体、地域住民が一体となって行うべきものであるが、各主体間における野良猫対策に対する価値観の違いによって温度差が生じ、思うように対策が進められない地域があり、それを踏まえた上で活動を実施する必要があることが明らかになった。

人間と猫の共生のためには、動物愛護の精神と動物管理における責任の両方が必要であり、行政と民間団体だけでなく、地域住民も活動に参加することが重要であるが、その理解を得るには時間を要する。「酒田地域ねこの会」の事例では、地域猫活動を進めたくても住民からの理解を得にくく、活動が順調に進んでいない現状にある。

以上のことから、人と猫が共生できる環境づくりのために、現在行われているTNR活動（捕獲＜Trap＞し、避妊・去勢手術＜Neuter＞を行い、元の場所に戻す＜Return＞）を最優先に進めることで確実に野良猫の増加を減らしつつ、それぞれの団体のキャパシティを超えない範囲で保護・譲渡を行うこと、また、これと同時に講演会や説明会などを通して地域猫活動の重要性を周知し、人と猫が共生できる環境づくりの促進につなげることを提案したい。